

山丁の短篇小説集『郷愁』について

管 虹

要 旨

山丁は活躍于偽滿文壇の知名作家、在偽政府の高压政策下、他提倡乡土文学、并推出其系列实践小说集《山风》、《乡愁》、《丰年》。本文着重论述其第二部短篇小说集《乡愁》,从其创作背景、小说命题的涵义、以及乡土、乡愁等关键词着手,考察《乡愁》与《山风》的内涵与创作手法的不同,并从由暗到明这一小说风格的转变中探寻山丁作为一个伪满作家的成长过程及其深刻的社会含义。

キーワード……山丁 郷愁 山風 郷土文学 満洲

はじめに

山丁の第二短篇小説集『郷愁』¹⁾は、新現実文芸叢書第二集として、1943年5月に出版されたものである。「郷愁」「一天」「熊」「鎮集」「碱土」「伸到天辺去的大地」「猪」「峡谷」「残欠者」「梅花嶺」²⁾の10編が収録されている。

『郷愁』についての先行研究は極めて少ない。文学史の中でまれに『郷愁』について言及されるにしても、テキストに触れた作品論ではない。あくまでも山丁の提唱した「郷土文学」に触れる時に、その理念の実践例として『郷愁』に言及するだけである³⁾。

数少ない『郷愁』についての先行研究としては、以下の三点が注目される。

1、劉国興「暗夜里的灯光——讀山丁的短篇小説集『郷愁』」⁴⁾は各短篇のあらすじをまとめた上で、自分の感想を簡単に加えた論である。

2、申殿和・黄万華「東北郷土文学的辛勤耕耘者——山丁創作簡論」⁵⁾は、短篇「碱土」「一日」「伸到天辺去的大地」「鎮集」の内容を簡単に紹介している。

3、馮為群・李春燕「山丁論」⁶⁾は「残欠者」だけに触れている。

いずれも本格的な作品論とは言えず、恣意的な感想を示すにとどまっている。そこで本論では山丁の第二短篇集『郷愁』について全面的に評価を試みる。『郷愁』はいったいどのような社会背景で作られたのか、この短篇集に収録された作品の意味、また「郷愁」とは何か、なぜタイトルは「郷愁」でなければならなかったのかを明らかにしたい。その上で第一短篇小説集『山風』⁷⁾と、内容的、技法的に比較してみる。第一短篇小説集の創作時期においては、山丁は一

人の「満人」としても、作家としても未熟の段階にあったと見られる。『山風』から『郷愁』までの間には「満洲国」は少しずつ変化を見せている。そういう社会環境に置かれた山丁もその変貌を『郷愁』を通して見せている。特に作品の上では「暗」を表現した『山風』であったが、『郷愁』では「明」の希求が見られる。この二篇に現れた相違・変化は、いったいどういう意味を持っていたのかについても解明したい。『山風』から『郷愁』までその変容の過程を具体的に検証することによって、作者の創作意識の軌跡について、評価を試みることにする。

さらにそのような作業によって、植民地支配下の中国人の生活と意識、作者、あるいは作中の人物の中国人としてのアイデンティティの変化についても追求していきたい。

1、小説のタイトルと『郷愁』の出版事情

『郷愁』には10篇の短篇が収録されているが、作者はその中の「郷愁」をそのまま小説集の題名にした。「郷愁」はこの短篇集では必ずしも完成度の高い作品であるとは言えないと思われるが、なぜこれを小説集のタイトルにしたのだろうか。また、第一短篇小説集『山風』の出版事情⁸⁾は複雑であったが、『郷愁』の場合はどうであったろうか。その出版事情とタイトルの間にどのようなかわりがあるのか、などの疑問を解明するために、まず短編小説集『郷愁』に作者山丁が自ら書いた序文を分析しよう。

ここの幾短篇はこの3年間で書いたものである。もともと「如晦集」と名づけるつもりであり、また文章の前に『国風』の詩句を書いた。

「風雨如晦、鷄鳴不己」⁹⁾

その後、亡くなった妻の病氣中、原稿を失くしてしまい、それを上梓する気持ちも薄らいだ。

今年の春、ある書店が文芸物を出版するというので、作品集の出版を友人に勧められた。私は早速原稿を整理し、書店に出した。思いがけない紙不足で出版は半年延びた。今回、出版の機会が得られ、感慨に耐えぬ。自分にとっては第二短篇小説集であるが、郷土色は依然強く出ている。いつか私は文学の故郷を離れ、その浪人になるかもしれない。それはきっとつらいことだろう。そこで、かつてに「郷愁」をこの本の題名にした。それはそのときの気持ちによるしかないのである。

この初夏の静寂な深夜に、無言のままで机の前に座り、文筆活動して以来その半生を振り返って、自ら恥ずかしい気持ちに襲われ、幸か不幸か、私は相変わらず文芸と悪縁を結び、自分の小径を歩んでいる。それらの呪い言のなかで、私はまだ擱筆していない。書けることをすべて書き出し、すでに過ぎ去ったこと、私に新しく創作されたことを頭から卸す。我が友よ、私はこれ以上それらを負うことができないのだ。

新しい生活は私を待っている。新しい勇気は私を励ましている。過ぎたことが流され、それは懐かしいことと思わない。私は相変わらず自分の話に固執している、つまり「新しきものが古きものを替えるのは永久なり。」

—昨年の夏、『山風』が出版されたとき、率直な批評をもらい、光栄に受けとめた。何人かの知らない批評家にここで敬意を表する。(7月6日)¹⁰⁾

这里的几个短篇，是我近三年中写的，原打算名为如晦集，在文前还不写着国风上的诗句。

[风雨如晦，鸡鸣不已]

后来那束原稿在亡妻病中遭到流失，付梓的心情也跟着淡薄了。

今年春天，一家书店要出点文艺创作的东西，我的朋友君怂恿我收集一般付印，我就很快把他们整理出来交给书店，不想因为纸张的饥馑，足搁浅了半年，这一次能有出版的机会，我是不胜感慨的。虽然是我的第二个短篇集，那乡土气味还很浓厚，我想，说不定什么时候我能离开文学的故乡，甚而作它的浪子，那一定是很愁苦的事情。随便拿[乡愁]做这集子的书名，也无非是宜于当时的感情而已。

在这初夏静穆的深夜，默默地呆坐桌前，思索着我低从文的半生，一种自惭形秽的心情强烈地摇撼着我，幸与不幸呢，我仍与文艺结着恶缘，仍在走着自己的小道，在那些咒语中，我还没有放下笔，我将把我可以写的一切东西写出来，把那些被我生活过的，被我重新创作的，从我的脑中卸掉，我的朋友！我实在不能再负有它们了。

新的生活在等待我，新的勇气在鼓荡我，过去的让它过去；那是没什么可眷恋的，我还执拗着自己的话[新的永久是代替旧的。]

前年夏天，山风出版时，曾读到许多正直的评文，我很荣幸的接受了。对于那几位不相识的批评者，谨在此写出我的敬意。(七月六日)

本書の出版事情と山丁の当時の事情を解明する上で重要と判断し、全文を引用した。ここから以下のことが明らかになる。

(1) 具体的な執筆期間が推定できる。

「3年間」とはすなわち、1943年7月からさかのぼって1940年からの3年間を指す。

(2) 時代背景がはっきりしている。

「風雨如晦、鶏鳴不已」

(3) 作者の危ない境地が明らかにされる。

「いつか私は文学の故郷を離れ、その浪人になる、それはとてもつらいことである。」

(4) 自らこの短篇集の内実を規定している。つまり相変わらず郷土文学の作品である。

「郷土色は依然強く出ている」

(5) 山丁の信念が明らかにされている。

「新しい生活が私を待っている、新しきものが古きものを替えるのは永久である。」

特に注目すべき点は、時代背景であろう。すなわち文学者としての山丁の置かれた厳しい故郷の現状である。「風雨如晦、鶏鳴不己」は「国風」の詩句であるが、すさまじい社会動乱・暗黒な時代を形容する時に使われている。それは『郷愁』を出版する直前の「満洲国」を指しているであろう。そういう社会環境に置かれた山丁は自分の運命も自ら把握できない。「満洲国」にいる彼は、実は故郷をもう失っている。そこで精神の支柱として、大好きな文学を故郷と喻えているが、身に迫る危険は自分の「筆」によって招かれた災いだと分かっている山丁は、いつかやむを得ずそこを離れることを予想している。それは彼にとって、当然つらいことであろう。

以上は山丁が本当の故郷を離れる前、『郷愁』の原稿を友人に預ける直前の山丁の心境であるが、『郷愁』の出版事情をより明瞭にするために、「満洲国」の文芸政策の変化と山丁の文学活動を関連させながら、簡単に遡ってみよう。

青少年時代から山丁は文学への関心を示し、1931年処女作「火光」(『現実月刊』1931年創刊号)を発表した。33年から簞軍・簞紅を中心とするハルビンの文学青年と交流するようになり、山丁も本格的な文学活動を始めた。

しかし、文学も含む社会環境は変わりつつあった。日本の「満洲国」の支配は一段と厳しくなった。「満洲国」の文化統制は三つの段階に分けられている¹¹⁾。第1期は1931年9・18事変から1937年7・7事変までである。第2期は37年7・7事変から41年3月「芸文指導要綱」¹²⁾の公布までである。第3期は41年3月から45年8月15日日本敗戦までである。特に第2期以降には、中国人の反日思潮の高揚と複雑な国際環境のなかで、「満洲国」における思想・文化的統制は更に厳しくなった。1940年12月17日、「満洲国弘報処」が設置され、報道・言論などを統一的に監視・管理する、いわゆる「官製支配」が開始された。さらに1941年3月弘報処より「芸文指導要綱」が公布された。この「要綱」には「我国芸文八建国精神ヲ基調トス、從テ八紘一宇ノ大精神ノ美的顕在」とされている。「満洲国」の「建国精神」とは「日満一徳一心、民族協和、王道楽土、道義世界の現実を理想とする天皇の大御心に外ならない」¹³⁾のものであった。「建国精神」の趣旨に反する作品は出版禁止となり、多少疑念のあるところはすべて削除され、「削除済」の印を押されてからはじめて出版できた。

さらに、日本は「満洲」には文学がない、文化的水準が低いとの口実を作って、「水準の高い」日本文化・文学を「満洲」へ押し付けようとし、文化・思想の面でも「満洲」を日本化しようとした。そういう厳しい情勢の中、「満洲国」にいる中国人作家は何を書くべきか、文学の道はどう歩んだらいいかというアイデンティティが問われる。山丁は「郷土文学与『山丁花』」¹⁴⁾を発表し、「満洲国」の中国人文学者たちに文学の方向、文学の表現内容と実質を示そうとした。

その結果「郷土文学」をめぐる論争も引き起こされた¹⁵⁾。さらに山丁は自ら「郷土文学」の実践として、暗黒の社会現実を暴露する第一短篇小説集『山風』を出版した。当時の社会では、山丁の提唱した「郷土文学」の理念と彼の文学活動は大胆で、「反社会的」であったといっているであろう。

1942年春、山丁の妻呉秀栄が病死した。葬式のため、山丁は300円を借りた。お金を返すため長篇『緑なす谷』を書き始めた。(これは一説であるが、また山丁は短篇しか書けないと言われたので、山丁が意固地になって、長篇を書いて見せようとしたという山丁の説もある¹⁶⁾)『大同報・夕刊』(1942年5月1日から1942年末)に連載し始めた。まもなく大内隆雄によって日本語に訳され、『哈爾濱日日新聞』(1942年5月から)に連載された。

1943年3月、長篇『緑なす谷』は長春の文化出版社によって刊行されることになった。しかし、印刷も終え、刊行直前になって、弘報処から「嚴重な問題があり、出版社から出してはいけない、販売してはいけない、処分を待て」¹⁷⁾と警告されて、発行禁止となった。後に疎通を図って、数ページを削除されたうえ、「削除済」の印が押されてようやく販売が許された。『緑なす谷』は出版できたが、2度家宅捜査され、外出する場合は尾行されていた¹⁸⁾。そういう厳しい社会状況と自分の置かれた危険を避けるために、1943年9月30日山丁はやむを得ず、友人と2番目の妻羅麦の協力で、郷土を離れ、北京へ脱出した。出発の前に短篇小説集『郷愁』の原稿を張辛実に渡した¹⁹⁾。

『郷愁』の序言、各短篇の創作時間を考慮して、山丁は「満洲国」の文化統制の第2期の後期に『郷愁』を完成したと判断できる。さらに、この時期、山丁は「郷土文学」の論争を引き起こし、『緑なす谷』の出版をめぐる問題もあった。山丁は自分の危険な状況を考慮し、郷土を離れることを予測して、この短篇集に、短篇小説「郷愁」のタイトルを書名としたのではないかと。そういう意味で「かって」につけたのではなく、熟慮した上でつけたと考えられる。

以上、『郷愁』の出版事情とタイトルとの関連について整理・分析した。次に小説集の題名になった短篇「郷愁」はどういう小説なのかについて検討する。

2、「郷愁」について

山丁の短篇「郷愁」に関する研究はこれまでほとんどなされていない。それは山丁文学全体について研究されていないことが原因でもあるが、一読してストーリーをあまり持っていない「郷愁」は山丁の文学における独自性、存在意義が理解されていないからである。筆者は、「郷愁」という短篇は山丁が郷土文学という文学理念を实践する過程では、内容と表現技巧の角度から見ると、それまであまり見られていない高次元の作品だと考えられる。

郷愁や故郷などの言葉に山丁はずっとこだわっているようであるが、郷愁を直接述べること

のできない創作環境の中、この作品において郷愁がどのように表現されているのかについて考察したい。本節では、まず小説「郷愁」の中身を掘り下げ、とりわけ郷愁という言葉に着目し、創作手法などの分析を行なう。

この短篇には複雑なストーリーはない。主人公ニコライは60歳のロシア人で、薬剤師をしている。ハルピンに来てもう10年。ニコライの働いている薬屋の隣は、語り手の「私」の家である。父は弟にロシア語を習わせたいので、ニコライが時に家に来る。言葉はあまり通じないけれど、片言からニコライに5人の子供がいて、2人は海で働き、妻とほかの3人の子供は大草原で生活していることだけが分かる。家へ帰りたくてたまらないので、ニコライはひどいホームシックにかかり、深酒をし始め、ある未亡人と同棲する。最後にニコライは故郷へ帰る。

劇的なストーリーを持つとは評しえない本作で、特に注目すべきは、ニコライが酔っ払いつつも繰り返し発する次の言葉である。筆者が注目したいのは、作者がニコライに何度も「帰ろう」と語らせている点である。この「帰ろう」という語に込められている意味は何か。さらに、何故彼は繰り返し「帰ろう」と言うのか。

俺は帰ろう。²¹⁾(以下略)

間違えたかも、間違い続きの十年!²²⁾(略)

俺は帰ろう。海に呑み込まれようとも怖くはない。²³⁾(略)

——俺は帰ろう。海は俺を呑み込まないよ。²⁴⁾(略)

——我要回去!(略)

——也许错了,错了十年!(略)

——我要回去!……我不怕海洋吞掉我。(略)

——我要回去,海洋不会吞掉我的。(略)(下線は筆者による)

ニコライはハルピンに来る前、船員であったので、うわごとのなかで、何度も海に言及する。「私たち」とは深く付き合っておらず、さらに言葉をあまり交わしていないが、そのわずかな会話文のなかに「帰ろう」という語が繰り返し、使用されている点は、注目すべきである。なぜならニコライの「帰ろう」に「私」は特別の感情を抱いているからである。

彼の声には故郷の、はてのない吐息が漂っている。この吐息は私たちの心に深く入り込んでくる。

しかし、私たちは……²⁵⁾

他的声音里盛荡着一种家乡的,无边扩大的气息,这气息侵蚀着我们。

——可是我们……

ここで、考えなければならないのは、「故郷」にいる「私たち」はなぜニコライの話に「浸蝕」（原文のまま、ここでの意味は深く入り込むという）されたのか。普通ならば、惨めな相手に同情するところだが、ここでは同情ではなくて、「浸蝕」されている。つまり共感以上に情緒的になってしまったのである。この疑問を解くためには、筆者はニコライという登場人物の作中における基本性格を明らかにしておくことが重要だと考える。

この短篇の創作時期が1941年であること、ストーリーからすると、本作品が取り上げている題材は日本人が「満洲」の政治、経済などの権力をすっかり握った後のことであると言える。主人公のニコライは「満洲」に来て10年後、「満洲」の政権の転換で、彼の生活はすっかり破綻している。ニコライと彼の情婦のような最底辺に生きている白系ロシア人は、失業などの原因で、生計はますます苦しくなっている。彼らの意識も少しずつ変わってくる。故郷へ帰ろう、帰ろうという想いが次第に強くなっていく。その帰属意識が特に酔っ払ったとき、意識の深層から表層に現れてくる。

そのような望郷の念はなぜ「私たち」を共鳴させたのか。それは「私たち」がどういう存在であるかにかかわってくる。語り手である「私」は、日本人支配下の「満人」であることは明らかである。それは、ニコライよりもっと惨めな類であり、被支配者という受身的な存在であるからこそ、「帰る」とも言えない立場になってしまった。作中に使われている省略符号はいかにも示唆的な働きを持っており、「しかし」の後、表面に出すことが許されない、多くの内容が省略されたと考えられる。つまり、「私たち」は郷土で生活していながらも、故郷を失った人である。ニコライの「帰る」は、実の「故郷」を指向しているのに対し、「私」には「帰る」場所としての故郷はない。日本人によって、支配された「満洲」は断じて「私」の故郷ではない。しかも「私」は故郷を求めてやまない。作者の置かれていた社会環境、作品の書かれた時間、作中に配置されたタイミングなどの要素を考えて、作者の意図的操作の可能性を否定することができないと思われる。作中に出てきた帰属意識は「満洲国」に住む中国人のアイデンティティの基底にかかわることと認められる。

ニコライと「私たち」は対照的に書かれている。ニコライは顕在的な存在であり、彼の郷愁は表に、言葉に出している。しかし、「私たち」は隠蔽的な存在であり、「私たち」の郷愁は言葉に出せず、しかし、それは「私たち」の生活に沁み込んでおり、「私たち」の心底に流れている。これはいわゆる「満洲」作家のよく使う「暗喩」と見なされている。ロシア人の口を借りて、「私たち」の言えぬ郷愁を表現しようとしたのではないかと考えられる。つまり「私たち」の「郷愁」の念はかろうじてロシア人の口を借り、暗示の形でしか表されないのである。小説「郷愁」は、物語の叙述の底流に己の心意を潜ませるといった二重の表現構造をとっているのである。

「郷土の色は強く出ている」この「郷愁」は、山丁の独特な言語表現によって、「北満」のエ

山丁の短篇小説集『郷愁』について(管)

キゾチックな雰囲気を描き出している。特に子供がニコライをからかう歌謡は諧謔性を持っているが、中国人のロシア人に対するイメージがいきいきと描かれている。

でっかい鼻、おおばか、
おおばか、でっかいパンを売る、
でっかいパンを売る、損してしまっちゃって、
むにゃむにゃオシッコを漏らしているよ。²⁶⁾

大鼻子，大傻瓜，大傻瓜，卖列巴，卖列巴，赔了本，叭叭咕咕流尿水。

また、作中に出てくるロシアの黒パン、ウォッカ、ひまわりの種、牛乳配達、聖書、クリスマス、地平線、中国人に半分通じ、半分通じないロシア語、ロシア人のなまりの強い中国語など、それらの食べ物、言葉、景色などは中国のほかの地域ではほとんど見られない「北満」的な風景そのものが物語られている。

そのような表現によって、ロシア人の「郷愁」を呼び出すと同時に、「北満」の中国人の「郷愁」を暗示する。これこそが、山丁の「郷土文学」という理念で示そうとしたことではなからうか。

本節では、短篇「郷愁」の内実・文学表現などの分析によって、ものをはっきり言えない厳しい社会状況のなか、山丁が自分の提唱した「郷土文学」の理念をどのように実践上さらに前進させたかについて考察してきた。二番目の短篇小説集に「郷愁」というタイトルをつけた深い理由も、肉体の苦痛だけが表現されている第一短篇集『山風』よりは、表現上の問題も含めて、『郷愁』では山丁の文学者としての視点・問題意識が高まったことも明らかになった。

そこで次に問題になるのは、『郷愁』に収録された「郷愁」以外の諸短篇は、「郷愁」という一語に収斂されるかどうか、つまり、「郷愁」が小説集のタイトルとしては、適切であるかどうかという点である。

3、『郷愁』の内実及び『山風』との比較

前述したように、「満洲国」期の文学史の中でまれに短篇集『郷愁』に触れるものはあっても収録作品について詳述した論考はこれまでない。もちろん、第一短篇集『山風』との比較検討もなされていない。それは、周知のように「満洲」時代の中国人作家・作品がいままで重要視されなかったからである。山丁の場合は、「郷土文学」を提唱したので、「郷土文学」論争に論及する場合、第一短篇集『山風』と長編『緑なす谷』は「郷土文学」の実践作として多少論じ

られてはいる。が、『郷愁』という小説集の特質を明らかにするまでにはいたっていない。

本節では『郷愁』には「郷愁」以外のどんな小説が収録されているかを示した上で、内容的、技法的に第一小説集『山風』と比較してどのような異同が認められるかについて検討したい。その目的は、二篇の短篇集と比較することで、山丁という「満洲」の中国人作家の成長、発展の過程を明らかにするところにある。そこで、まず諸作品の内容を簡単に示し、これら諸作品に認められる特徴を明らかにしたい。それによって山丁の『山風』時代の作風が『郷愁』時代においてどのように変わったのかを明らかにしたいからである。

こうした作業は単なる内容紹介に陥る危険はあるが、これまで十分な『郷愁』論が公にされてこなかった以上、ある程度はやむを得ないことと判断した。

「一天」

黒三が受けた最大の屈辱の一日を書いた作。妻はほかの男（金三）に寝取られ、もらった金は家族の食事代になる。黒三はそうと知っただけで屈辱を我慢してきたが、ある夜、金三は泣き続ける子供を邪魔だと、放り投げ、その子供は死にそうになる。黒三の妻は留置所に投げられ、金三は法を逃れて勝手気ままに生活する。

小説の最後に黒三はこう思った。「生きるために最大な侮辱、苦痛を忍んできた。生きるために不完全な家庭を維持している。なぜだろう。」彼はその答えが出せぬまま、暮れない霧のなか消えていく。

「熊」

呂連拳「狗熊」と父呂貴の屈辱の生活ぶりを書いた。呂連拳は黒熊のように生きている。渡船組合の権力者金大兔子が「狗熊」の好きな女を奪う。孤独、冷たい、辛いと「狗熊」はいつも感じている。船員老安は「狗熊」のように従順にしていけないので、権力者の車を盗み逃げた。呂貴、宋明（船員）が疑われて、牢屋に入れられた。「狗熊」は無力のまま倒れた。

「鎮集」

郷長の娘艾艾は家の若い砲手（家を守る人）小三子が好きになった。二人は駆け落ちをした。ある小さな町で生活し、偶然にロシア人の家の砲手になった。郷長と彼の走狗は小三子を見かけたが、ロシア人をバックにした小三子に、自ら「おれ、間違えた」と謝る。

「破土」

中下層官吏の腐敗を書いた。地方官吏が公務（税金を納める）を持っているが、各自下心を持って田舎へ行く。また田舎の会長もこれを契機にして、農民を搾取する。

山丁の短篇小説集『郷愁』について（管）

「伸到天辺去的大地」²⁷⁾

村を支配する大地主楊四爺と彼の大家族、家来たちが匪賊の襲撃を避けるために村を出て行く。行く途中、楊四爺は自分の情婦にした家来独眼竜の妻一枝花のところへ寄ってみた。自衛団の邱団長とその心腹馬文牘が一枝花を侮辱している場面をみて、三人をも殺した。争いのなか、一枝花の子供はいつの間にか踏まれて死んだ。あまりの恐怖に襲われ、そのうち楊四爺は死んでしまった。その間、独眼竜は村へ帰り、家族の残酷な死にショックを受け、復讐しようとするが、ほかの家来に殺された。

「猪」(猪とは豚のことである)

鉦山労働者たちの豚のような生活を描いた作品である。楞頭青は同郷鉦山労働者張維周の妻と不倫関係を持っている。労務所の門番于旭東はその秘密を知ったので二人を脅迫し、金を取る。不満に思ったので楞頭青は于旭東を殴りつけたあと、張維周と一緒に列車に乗って、どこかへ逃げ出す。残された妻と五人の子供のいる張維周の家に今度于旭東は夜に潜り込んだ。

「峡谷」

少年が峡谷に住む親戚の家に来て、偶然に一人の孤独者と出会い、毎日彼から物語を聞かせてもらう。そのうち、孤独者は自分の物語を話した。軍人であった彼は賭け事に夢中になったが偶然に権力者の妻と愛し合って、駆け落ちした。女は病気がかかり、寂しい峡谷で死に、彼は一人ぼっちになった。翌年、少年はまた峡谷に来たが、荒れ果てた庭しかなかった。

「残缺者」²⁸⁾

三人家族だが、父は20年前、勞工として北満へ行き、片足が不自由になった。母はあまりに泣いたので片目が不自由になった。息子は口が利けない者である。父も息子も不審な人と警察に思われ、同じ拘置所に入れられた。やっと拘置所から出され、家族三人は一緒に暮らすことができた。

「梅花嶺」

やむを得ず玉成醸造主の妾になった蘭英は、その屈辱的な生活に耐え難く、逃げようとしたとき、幼馴染の大魯(玉成醸造家の馬の世話役)と出会い、肉体関係を持ち、子供をもうける。しかし、そのうち二人の関係が露呈し、大魯は侮辱の生活に我慢できず、その家を出る。蘭英も赤ん坊を抱いて、そのあとを追っていく。

以上、『郷愁』に収録された「郷愁」以外の諸作品の概要を示した。一見して、これらから言えるのは、『郷愁』は相変わらず山丁の提唱した「郷土文学」理念の作品群である。諸作品の題

材について全体から見れば、やはり「満洲国」の最底辺の中国人の生活を描いている。それは第一短篇集『山風』とほぼ同じであり、登場人物の社会的身分、立場の相違などは、『山風』と『郷愁』との間であまり認められない。

しかし、大きな相違は二篇の全体の雰囲気、作風、主人公の結末である。『山風』は「暗」そのものであり、息苦しくて、全く「生」の見込みが見えない。『山風』に登場する中国人は生きようと思っても生きる道がないし、しかも、その苦しい世界から脱出しようとする人はあまりいない。『山風』の登場人物は次から次へと死んでしまい、しかもその死はいずれも自然死ではなく、変死である。または捕まえられて、留置所や監獄に入れられる。

両作品の登場人物の結末の相違は一目瞭然で、それについて整理し、表の形でまとめてみた。

表(1) 『郷愁』の登場人物の結末

変死 (5人)	自然死 (3人)	留置所に入れら れる(3人)	脱出する (7人)	その他 (5人)
「伸到天辺去的 大地」の独眼竜、 邱团长、馬文牘、 一枝花と彼女の 子供	「狭谷」の女 と男「伸到 天辺去的大 地」の楊四爺	「狗熊」の呂貴、 方明 「一天」 の 黒 三 の 妻 「残缺者」の父 と息子	「梅花嶺」の蘭英、大魯、 彼らの子供 「峡谷」の 男と女 「猪」の楞頭青、 張維周 「鎮集」の艾艾、 小三子	「残缺者」の家族三人は仲 良く暮らすことができた 「狗熊」の「狗熊」が無力 のまま倒れた 「一天」の 黒三は暮れない霧の中消 えていく。

表(2) 『山風』の登場人物の結末

変死 (12人)	自然死 (1人)	留置所に入れら れる(4人)	脱出する (1人)	その他 (大勢)
「臭霧中」の琴子、琴子の母、 陸大戈 「銀子的故事」の鄭 新の父 「壕」の趙大福、小 邦 「孿生」の老九奶、嫁、 双生児 「狭街」の劉大哥、 劉大嫂	「北極圈」 の大青と 蓉子の子 供(物語に 登場して いない)	「銀子的故事」 の鄭新、小季 「銀子的故事」 の大青 「孿生」の鉄柱	「狭街」の 劉大哥	「臭霧中」の琴子の父、山 へ逃げた 「銀子的故事」 の鄭新の母は重病 「北極 圈」の蓉子は村長の妾にさ れた 「織機」の労働者た ちは失業者になる 「山風」 の作男たちは解雇された

表(1)(2)を比較対照してみると、登場人物の結末に大きな差が認められる。

表(1)(2)に出る人数は、登場人物の総人数ではない。しかもダブっているものもある。表(1)では「狭谷」に登場した男と女は権力者の支配から脱出してから、大自然の中で自然死を

迎えた。「残缺者」では、父と息子は留置所に入れられたが、無実のため出ることができた。家族3人は最後に団欒できた。「伸到天辺去的天地」では独眼竜、邱团长、馬文牘、一枝花と彼女の子供は一回だけ登場して、主要登場人物ではないといえよう。その4人を除けば、変死した人は1人しかいない。『山風』と『郷愁』の中に作品はいずれも短篇であり、ストーリーは複雑ではなく、登場人物の数も多くない。登場人物総数（名前が出るもの）は前者では61人；後者では66人である。登場人総数はほぼ同じであるが、主人公の結末が大分違う。『山風』では変死は12人、『郷愁』では5人である。『山風』では脱出する人は1人、『郷愁』では7人にもなっている。それは明らかに山丁が序文の中で表明したように、「新しい生活が私を待っている」からである。しかし、『山風』では息苦しく、真っ暗な世界から脱出しようとする人が一人もいない。表（2）の「その他」では、「銀子の故事」の鄭新の母、「北極圏」の蓉子はストーリーの筋から見れば、ほとんど生きる見通しが無い。また「織機」では大勢の労働者が失業者になる。「山風」では、大勢の小作農が解雇される。「狭街」の劉大哥はせっかく脱出したが、結局他郷で死んだ。「これは運命だ」とは『山風』では数箇所表れたせりふである（たとえば、「北極圏」「臭霧中」）。つまり、その苦しい状態で生活するのは運命である、そのため、これに反発するのではなく、服従せざるをえない。

しかし、『郷愁』では「峡谷」の男と女、「猪」張維周、楞頭青、「一天」の黒三は、脱出の結果は分からないが、とにかく苦しい状態の中から逃げ出す。「鎮集」の小三子、艾艾は封建的な勢力から脱出し、封建的勢力の象徴である艾艾の父が自ら小三子に謝る最後の場面は意味深く描かれている。「梅花嶺」の蘭英、大魯の脱出は、かなり期待できるような生活が彼らを待っているのではないかと推測できよう。

以上は、山丁文学の変化・発展を明らかにするという目的で、『郷愁』に収録された諸作品に注目し、特に内容の実質・表現技巧などを『山風』と比較して考察した。その結果、下記のような点が明らかになった。

第一短篇集『山風』を出版するまで、作家として、「満洲」の住民としての山丁は様々な苦難に満ちた生活をしてきたが、しかし「満洲」それ自体について、冷静に考える余裕がなかったように思われる。というのは第1短編集『山風』ではストレートに「暗」を描写することしかできなかった。彼が着目したのは「肉体」あるいは「生活」の苦しみでしかない。作中人物は苦しい中、したたかに生きているが、次から次へと死んでしまう。全く「生」の見込みが見えない。つまり、「満洲」に生きている中国人の生活、その実態をリアルに表現しただけである。

しかし、『郷愁』では「満人」の生活の苦しみが『山風』ほど強調されていない。むしろ精神的な苦痛を表現しようとしている。さらに生活的、精神的に苦しんでいる人々に生への展望を与えようとしていた。作者山丁の生への信念が書き込まれている。つまり「新しい生活は私を待っている、新しきものが古きものを替えるのは永久である」のである。『郷愁』の内容にも、

テクニクにも一次元的な表現だけではなく、二次元的な表現もできたのである。さらに、故郷、郷愁、あるいは「満洲」自体について、山丁が深く考えるようになったと思われる。表現の自由が制限された中、山丁は最大限に表現上の技巧を活用し、自分の提唱した「郷土文学」の理念を深化した。現実を暴露するにとどまらず、さらに一步前進し、「死」から「生」へ、あるいは「暗」から「明」を希求し始めた。文学の社会的機能を発揮させ、「満洲」の中国人のアイデンティティの深化をさらに明確にしたと考えられる。

結びにかえて

『郷愁』とほぼ同じ時期に出版された詩集『季季草』で、山丁はこう書いた。

詩人の道はそんなに自由ではない。それは他の芸術と同じく、歴史的法則の制約を受けなければならないのである²⁹⁾。

诗人的路子并不怎样自由的，它也和旁的艺术相同，要受历史的法则的制约。

彼の語ろうとしたのは、詩だけではなく、いずれの芸術創作環境も不自由だということであろう。山丁の文学制作に関する基本的な考え方は、「満洲」の中国人のアイデンティティを求め、現実を暴露する「郷土文学」というものである。小説集『郷愁』は相変わらず「郷土文学」作品であり、当然それは「歴史的法則の制約」のもとで書かれたものである。

暗黒の現実とは当時の中国人作家が臨んでいる共通な社会環境である。「暗」をそのまま作品に扱っている中国人作家は多い。彼らが「暗」を描写する本意は、本当に「暗」そのもの自身なのかという疑念が浮かんでくるが、ここでは、山丁が自分以外の中国人作家の「暗」をどう察していたかを見てみたい。

山丁と同じく「文叢派」に属する秋螢は、「暗」を描写する作家であり、「郷土愛」の作家だといわれている。作品には山丁の作品と同じように暗い雰囲気漂い、作中人物もみな悲惨な運命を抱えている。秋螢が自作の『去故集』序では自分の「暗」の心情を吐露し、また作中の登場人物を煉獄に入れて、苦しめなければならない理由を説明した。また登場人物を煉獄に入れるのではなく、現実が彼らを煉獄に入れたわけであり、自分の筆で現実を書き変えることはできないと言い加えた。そのような秋螢について、山丁は『去故集』の作者でこう言っている。

(「暗」は)満系の批評家の満系作家に向けた観念的な批判である。その批判を読んだ私たちには弁論しようとする話がたくさんあるようであるが、実は弁論してもメリットがない。「八不主義」³⁰⁾とはっきり表明したのではないか(略)時折自己解剖を

行なったり、自問したりする。どうして明るくならないのか？ われわれは、貧しい人々の生活を書くと恥をかいてしまう土地で生活しているのか？

秋螢の作品は「暗」を描く。しかし、この「暗」は「明」への希求であり、「明」の兆しでもある。われわれ作家はあたかも葬送曲の歌い手のようなものであるが、もし新しいものを呼び起こせるならば、われわれも健康的で、明るいメロディーを奏でることができると確信している³¹⁾。

这是在满系批评家一致对满系作品的观念批评，我们读了人家的品文仿佛有许多话要辩驳，其实辩驳也无益处。“八不主义”不是明晃地颁在那里吗？（略）有时也自己解剖自己，问自己，我们为什么不明朗起来呢？我们是活在以写穷人为可耻的土地吗？

秋莹的作品是刻画暗的。这暗则是“明”的希求，是“明”的征候。我们的作家仿佛是一群送葬的歌手，倘能唤出新的，相信也会奏出健康的明朗的声调的。

そういう秋螢の作品に滲んだ「暗」を山丁は「明」への希求、「明」の兆しでもある、と解釈した。そのような解釈を下したのは1941年のことであり、それは『郷愁』の創作期間中だと判断できる。その解釈からその時期の山丁の心情は『山風』を創作期間中と明らかに違うものだと見られる。秋螢の作品、あるいは秋螢の自序にも、「暗」から「明」への希求は鮮明に見えない。そういう意味で、その解釈はいかにも山丁が自分の当時の心情によって下したものでないかと伺える。

この論では、絶えず新しい「郷愁」が作り出されていく様態を、「満洲」に住む中国人の一人としての山丁精神史の一環として検証している。山丁の「暗」から「明」への希求こそが、殖民地化される中、中国人のアイデンティティの深化とも言えるのではないかとと思われる。つまり、山丁作品の変遷交代を経ながら、被支配側の中国人のアイデンティティも「暗」から「明」へと変わりつつあったと言える。

（補記）

- 1、いわゆる満洲国は中国では偽満洲国とされるが、本稿では「満洲国」とする。それはその特定の時間と空間を表す。つまり1932年から1945年の14年間、日本が中国の東北を基盤として造った偽りの国「満洲国」を指す。
- 2、この文章で郷土文学に「」をつけたのは、山丁の提出した郷土文学を表す。それは、ほかの郷土文学と形式、内容、性質が違うので、区別するためである。

<注>

- 1) 山丁(新現実文芸叢書第二集)『郷愁』(興亜雑誌社 康德11年5月)。
山丁:本名梁夢庚、1914年12月31日遼寧省開原県に生まれる。筆名に梁蓀、小蓀、梁茜、阿庚、孟庚、茅野、菁人、氷菲などがある。「満洲国」時代の有名な作家である。代表長篇に『緑なす谷』、短篇小説集に『山風』、『郷愁』、『豊年』、詩集『季季草』などがある。1957年から「漢奸文人」「右派」「反革命」などと批判されて、20数年間冤罪の重荷を背負い続けた。1979年ようやく名誉回復された。その後、回想文や「満洲」作家の作品を再編集・出版することに大いに尽力した。
- 2) 『郷愁』に集録された各短篇の初出は以下の通りである。
「郷愁」『新満洲』1941年5月。
「一天」(文選刊行会刊出雑誌)『文類』1940年。
「熊」『満洲文芸』1942年創刊号。
「鎮集」『文選』1940年第2輯。
「碱土」書き下ろしの作品か?不詳。後、確実に川端康成ほか編『満洲国各民族創作選集 第一巻』(創元社 昭和17年6月)に収録。日本語のタイトルは「碱性地帯」。
「伸到天边的地大」『学芸』1940年創刊号。タイトルは「沖」。
「猪」『大同報・我們的文学』1941年(月日は不詳)。
「峡谷」書き下ろし。
「残缺者」『華文毎日』第10巻第3期(1940年5月)に掲載。
「梅花嶺」『大北新報』1941年10月連載。
以上の10篇は全部『伸到天边的地大』(瀋陽出版社 1991年8月)に収録。
- 3) ここでは注目すべきことは「郷土文学」の実践作品として『郷愁』よりもむしろ『山風』を取り上げる論が多いことである。たとえば、岡田英樹「文学にみる『満洲国』の位相」(研文社 2000年3月 88~93頁)では、『山風』に収録された「臭いガスのなかで」「山風」「北極圏」などの7篇のあらずしが紹介されているが、『郷愁』は全く看過されたといっても過言ではない。
- 4) 『東方文学研究史料』第4輯(哈爾濱業余文学院 1986年11月)165~167頁。
- 5) 申殿和・黄万華『東北淪陥時期文学史論』(北方文芸出版社 1991年10月)242~260頁(同文章では第一短篇小説集『山風』に収録された短篇「機織」「臭霧中」「學生」「狭街」「北極圏」「歳暮」「銀子」などの7篇に触れている。)
- 6) 陳堤・馮為群・李春燕ほか編『梁山丁研究資料』(遼寧人民出版社 1998年3月)293~310頁(同書では『山風』に集録された「學生」「臭霧中」「機織」「山風」の4篇にも触れている)
- 7) 山丁短篇小説集『山風』(文選刊行会 1940年6月)『盛京時報』1941年文芸賞受賞。
- 8) 『山風』の出版事情についての論は多いが、拙文「山丁短篇小説集『山風』について」(『中国世界における地域社会と地域文化に関する研究』第2輯 2003年3月 24~25頁)の「1、山丁短篇小説集『山風』成立前後」を参照。
- 9) 『詩・鄭風・風雨』では「風雨瀟瀟、鷄鳴膠膠、既見君子、雲胡不瘳。風雨如晦、鷄鳴不已、既見君子、雲胡不喜」とある。「風雨如晦」あるいは「風瀟雨晦」は、社会の暗黒と混乱状態、また形勢の険悪の中で節操・気概を保つことのたとえとしてよく使われる。(羅竹風主編『漢語大辞典 12巻』漢語大辞典出版社 1994年4月 601頁を参照。)
- 10) 山丁 前掲小説『郷愁』5~6頁。
- 11) 「満洲国」文学は三つの段階に分けている。それを主張するものは以下の通りである。
張毓茂・閻志宏「論東北淪陥時期小説」馮為群・王建中・李春燕・李樹権編『東北淪陥時期文学国際學術討論會論文集』(瀋陽出版社 1992年6月)3~6頁。
閻志宏・張毓茂「序論」張毓茂主編『東北現代文学史論』(瀋陽出版社 1996年8月)5~8頁。
張毓茂「総序」張毓茂主編『東北現代文学大系 第1集評論卷』(瀋陽出版社 1996年12月)3頁。
何青志「第五編 東北淪陥時期文学総体論」李春燕主編『東北文学史論』(吉林文史出版社 1998年9月)262頁。
董興泉・白長青「关于東北現代文学研究中的幾個問題」王建中・白長青・董興泉編『東北現代文学研究論文集』(遼寧大学出版社 1986年9月)13頁。ただ、本書では、1931年9・18事変と1941年3月を境にして2期に分けられている。
錢理群「総序」錢理群主編『中国淪陥区文学大系・史料卷』(広西教育出版社 2000年4月)1頁。本書では、1931年9・18事変と1937年7・7事変を境にして2期に分けられている。
歴史学の分け方としては、普通3期に分けるが、1期と2期は上の分け方と同じであるが、第3期は1941年3月「芸文指導要綱」の公布を境にするのではなく、1941年12月太平洋戦争の勃発を境に分期する

のが、一般的である。たとえば、

王秉忠・孫継英『東北淪陥十四年大事編年』(遼寧人民出版社 1990年12月)

王承礼主編『中国東北淪陥十四年史綱要』(中国大百科全書出版社 1991年9月)

郭素美・張鳳鳴編『東北淪陥十四年史研究』(黒竜江人民出版社 1996年12月)

- 12) 「芸文指導要綱」は、満洲文芸家協会編「満洲文芸家協会の榮」(康徳8年8月 20頁)によると、
一 趣旨

1 文化ナル概念ニハ広狭ニ義アリ。第一ニハ人生ヲ完全ナラシメントスル人間ノ一切ノ価値創造ヲ意味シ、広ク政治、經濟、産業、交通ヲモ包含シ、第二ニハ科学、道德、芸術、宗教等人間ノ精神的勞作ニ依ル真、善、美、聖ノ顯現ヲ私指稱ス、然ルニ現在文化ナル用語は種々雜多ナル意義ニ於テ使用セラレ、甚ダシキニ至リテハ其ノ一部分ニ過ギザル芸術ノミヲ文化ト指稱スル者アリ、遂ニ觀念ノ混淆ヲ來タシ、文化自体ノ健全ナル発達ヲモ阻害スルニ至レリ、仍テ茲ニ其ノ弊風ヲ打破センガため文化ノ概念中ヨリ文芸、美術、音楽、演芸、映画、写真等ヲ抽出シ、芸文ト指稱シテ其ノ概念ヲ明確ナルシメントス。

2 産業、經濟、交通其ノ他諸部門ノ発達ニ比シ、我国芸文ハ未だ其ノ水準低ク跛行的狀態ニ在ルニ鑑ミ、茲ニ芸文指導方針ヲ確立シ、芸文ガ他ノ諸部門ト調和セル姿タル如ク之ヲ育成指導シテ全国ニ其ノ普及ヲ図リ、以テ物的建設工作ト並行シ精神的建設工作ヲ遂行セントス

二 我国芸文ノ特質

1 我国芸文ハ建国精神ヲ基調トス、從テハ一宇ノ大精神ノ美的顯現トス、而シテ此ノ国土ニ移植サレタル日本芸文ヲ經トシ、原住民民族固有ノ芸文ヲ緯トシ、世界芸文ノ粹ヲ取り入レリ成シタル渾然独自ノ芸文タルベキモノトス。

我国芸文ハ国民各層及各民族ニ適合シ親シミ易キモノトス、從テ典雅、壯麗、健全ニシテ、将来ノ目標ヲ世界芸文ノ最高峰ニ置クト共ニ其ノ内容ニ幅ト厚サトヲ持チ、都市的ナルモノアルト共ニ地方的ナルモノアリ、高尚ナルモノアルト共ニ平易俗ナルモノアリテ弾力性、親和性ヲ有スベキモノトス。

3 我国芸文ハ国家ノ建設ヲ行フ為ノ精神的生産物トシ、從テ国民大衆ニ美シキモノヲ樂シキモノヲ与ヘ、其ノ情操ヲ清メ高メ、其ノ生活ニ歡喜トカトヲ与フルト共ニ、其ノ發展浸透ニ依リ国民ノ團結ヲ鞏固ニシ、優秀ナル国民性ヲ創造シ、以テ國礎ヲ固ウシ、国家ノ生成發展ヲ助長シ、東亜新秩序ノ建設ニ貢獻シ、進ンデ世界文化ノ發展ニ寄与スルモノトス。

三 芸文団体組織ノ確立、四 芸文活動ノ促進、五 芸文教育及研究機關を省略。

- 13) 小山貞知著 満鉄弘報課編『満洲協和会の発達』(中央公論社 昭和16年8月)20頁。

そのほか協和会中央本部編集『民族協和の満洲国』(世界堂印刷 康徳6年3月)によると、「満洲国建国ノ精神ハ 之ヲ要約シテ：一、日滿一徳一心 二、民族協和 三、王道樂土ノ建設」とされている。

- 14) 山丁「郷土文学と『山丁花』」『明明』1937年7月。

- 15) 「郷土文学」についての論争は文学史で数多く取り扱われているが、管虹 前掲論文「山丁短篇小説集『山風』について」の「2、『郷土文学』の論争」(26~32頁)にまとめている。

- 16) 前掲書『山丁研究資料』11頁を参照。

- 17) 山丁「万年松上叶又青 『緑なす谷』重版瑣記」『東北文学研究史料』第5輯(哈爾濱文学院 1987年11月)15頁 原文：1943年2月、印刷厂正在装订时，突然接到伪满洲国弘报处的命令：“《绿色的谷》一书有严重问题，不许出厂，不许发售，听候处理”

- 18) 山丁「我與東北的郷土文学」前掲書『山丁研究史料』236頁。

- 19) 同¹⁷⁾201頁。張辛実は「満映」監督で、解放後長春映画製作所の監督をしていた。前掲書『山丁研究史料』22頁を参照。

- 20) 前掲 山丁小説『郷愁』10頁。

- 21) 前掲 山丁小説『郷愁』11頁。

- 22) 前掲 山丁小説『郷愁』11頁。

- 23) 前掲 山丁小説『郷愁』13頁。

- 24) 前掲 山丁小説『郷愁』10頁。

- 25) 前掲 山丁小説『郷愁』9頁。

- 26) この短篇は山丁の長篇小説『緑なす谷』の一縮図といつてもいいと思われる。山村の地主と匪賊との葛藤を書いた。匪賊も『緑なす谷』と同じ小白竜である。舞台「楊旬子」は作者が避難した姉の住んでいる山間の村大狼溝であると考えられる。この短編に出てくる地名「上坎」、「下坎」なども『緑なす谷』に出ている。短篇「山溝」も『緑なす谷』の一部だと考えられる。これについてまた別稿で考察する。

- 27) 「残缺者」は、短篇小説集『豊年』(新民印書館 中華民國33年6月)、『中国新文学大系 短篇小説第2巻』(1937年 1949)、『東北文学研究叢刊』第1輯(哈爾濱業余文学院 1984年 141頁)に収録。『緑なす谷』を出版する際、厳しい検閲を受け、やっと出版できたその直後に書いた短編は「残

「残者」である。この小説を通じて、「満洲国」はひとつの牢屋である、と全国民に知らせようとし、この物語は義理の兄の経歴に基づいて書いたものであると、山丁はいう。山丁小説「残者」(前掲『東北文学研究叢刊』第1輯 141頁)補注を参照。

28) 山丁『季季草』(詩季社 1941年12月)。

29) 山丁『季季草』自序「前掲書『山丁研究史料』218頁。

30) 八不主義は「満洲」時代を生きた作家がよく提起したが、その具体的内容は不明なようである。これまで不明とされていた内容が、岡田英樹『『満洲国』の創作環境と技巧』(西田勝編集代表『近代日本と「偽満洲国」』不二出版 1997年6月 390頁)によって明確になった。

31) 山丁『去故集』的作者』『大同報・我們的文学』1941年6月5日(張毓茂主編『東北現代文学大系 評論巻』所収 206頁)。

主指導教員(先田 進教授) 副指導教員(井村哲郎教授・佐々木 充教授)